

海をめぐる話

日本学術振興会カイロ研究連絡センター長 長沢 栄治
(前・信州イスラーム世界勉強会代表)

カイロの夏の暑さも峠を過ぎたようである。昨年よりは寝苦しい夜が多かったような気がする。本学振事務所は、この数年、西部沙漠にあるオアシス農村の調査チーム（上智大学の岩崎えり奈さんがリーダー）の“ベースキャンプ”となっている。調査の目的は、オアシス農村で持続可能な農業を行なうための水管理システムの提案である。7月に灼熱の沙漠から帰った同チームのメンバーは、カイロの方がオアシスだ、と言っていた。しかし、8月末に戻った人は、昼は確かに暑い、夜はしのぎやすく、カイロの方が蒸し暑い、と感想を述べた。

その原因の一つは、都会のアスファルトやセメントだらけの建物による「ヒートアイランド現象」であろう。もう一つは、ナイル川の水位が夏の終わり頃から上昇し、湿度が上



昇しているせいかもしれない。ナイル川はアスワン・ハイダムによって完全に遮断されている。しかし、水資源灌漑省による綿密な流水の管理によって、この時期には水位が上昇するように調整されているのであろう。こうした夏の終わりに始まる水位の上昇に合わせ、9月11日が古代以来の“ベイスン（水盤式）灌漑”による農事始めの日とされてきた。かつてはこの日に、土手を決壊させて水路から灌漑水を畑に引きこみ、農作業が開始されたのである。この古代の農事暦を受けつぐのが、エジプトのキリスト教宗派のコプト教の暦、コプト暦で9月11日はその元旦（ノールズ）となっている [注1]。

コプト暦第8月「バルムーダ月」（西暦4月9日～5月8日）の絵（収穫を祝う） 農業博物館にて

〔ウィルダネス wilderness をめぐって〕

それにしても夏は嫌いだ。暑いからだけではない。海も嫌いだからである。つまり夏も海も嫌いなのだ。なぜかという、水難事故のニュースを多く耳にするからである。

そもそも危険を顧みず、なぜ人は海に近づき、海に乗り出していこうとするのだろう。太古の昔から人類は、大海の孤島にまで移住し、その痕跡を残してきた。好奇心や憧れもあるし、また様々な物質的利害もある。最近、フランクリン自伝を読んでいたら、船乗り

になろうとする若い彼を心配して、父親が何回も押しとどめたという話が出てくる（松本慎一・西川正身 訳『フランクリン自伝』岩波文庫 1957 年）。もちろん、時代によって、また地域によって海に乗り出す思い、あるいは社会的背景はそれぞれであったのだろう。

こうした海への思い、またその背景を考える上で、ブズルク『インドの驚異譚』と、コンラッド『闇の奥』という二つの本を読み比べてみるのも意味があるかと考えた〔注 2〕。家島彦一先生が訳された『インドの驚異譚—10 世紀〈海のアジア〉の説話集』には、「シンドバッドの冒険」など『アラビアンナイト』の元ネタを含む、インド洋航海をめぐる数々の奇譚が記されており（第 11 話「巨鳥に乗って生還した船乗りたち」）、読んでいて楽しい。と同時に、インド洋での恐ろしい海難事故の記録も伝えている。一方、『闇の奥』の方では、「白人の墓場」と言われる熱帯アフリカで、熱に浮かれたようにさまよう「開発」の亡者たちの姿が描かれている。エドワード・サイードが注目したのもよくわかる（『文化と帝国主義』）。

10 世紀の『インドの驚異譚』のムスリム商人たちも、19 世紀末の『闇の奥』の「北部コンゴ貿易会社」に雇われた白人社員たちも、ともに金儲けのために海に乗り出していったという点では同じである。しかし、同じ金儲けといっても、たとえば商品としての奴隷の扱い方などを見ると、両者には大きな差があるように思える。もちろん、ムスリム商人によるインド洋での奴隷交易が、白人による新大陸「開発」と結びついて拡大していった近代以降の歴史を見るなら、両者の差は「連続的」なものかもしれない〔注 3〕。

とはいえ、『インドの驚異譚』の第 10 話「ワークワークの奴隷たちに乗っ取られた話」を読むと、商人と奴隷にされた島人の間には、金儲けに目がくらんで騙したつもりが騙される、滑稽（こっけい）な「人間」同士の関係が見て取れる〔注 4〕。他方、『闇の奥』で描かれているのは、首枷（くびかせ）をかけられ鎖でつながれた黒人たちであり、過酷な労働の末、緩慢な死を待つ黒い影にしか見えない彼らの存在感の希薄さである（高見訳 39-43 頁）。

さらに両者が明白に違うと思うのは、船から見た陸の世界の捉え方ではないかと思う。『インドの驚異譚』は、全能の神が創造された驚異（アジャールイブ）を書き留めることが目的であり、普通では考えられない生き物や住民の奇怪な慣習の記述は詳しい。一方、陸地の風景の描写はそっけない。これに対し『闇の奥』には、近づく陸地そのものに対するあからさまな欲望、しかし恐怖を伴った欲望が描かれている。それを象徴する言葉が wilderness である。中野好男訳（岩波文庫版）では、the silent wilderness を「荒蕪の沈黙」と訳し（同 46 頁）、高見浩訳（新潮文庫版）では「寡黙な大密林」（同 59 頁）という、いささか踏み込んだ訳語を選んでいる。

中野訳の「荒蕪」、すなわち「荒地」は、キリスト教の世界では悪魔や死霊が支配する死の土地を連想させる訳語である。悪魔（サタン）がイエスを試した「荒れ野の誘惑」は有名だ。この逸話と所縁のある「誘惑の山」（海拔 366 m）を訪れたことがある。ヨルダン川西岸の町、エリコ（アリーハ）に別荘を持つパレスチナ人・人類学者アリー・クレイボ

氏に案内され、この荒漠たる山を家族と一緒に登ったのは、1999 年の春のことだった。山中では洞窟内で孤独な禁欲の修行を続けるギリシア正教徒の修道士に会った。1993 年のオスロ合意後、パレスチナ自治政府がケーブルカーやカジノの建設を計画しているという話を、彼がうんざりした顔で説明してくれたのを思い出す。沙漠の死の土地にも「開発」は容赦なく押し寄せてくるのだ。

一方、高見沢の『闇の奥』では、wilderness は「大密林」と訳されている。訳者によれば「さまざまな汚濁に染まった“文明”とは対照的な、無垢の大自然。その現実的な相貌は、コンゴ奥地の巨木や蔦（つた）の絡み合った森林。以上を勘案して」この訳語を選んだ、とのことである（207 頁）。しかし、この小説の中心人物で、コンゴの奥地に一人暮らすクルツに対し、大密林がささやきかけてくる、などという下りを読むなら、やはり聖書的な「荒地」のイメージが下敷きになっているのではないかと思う。大密林（「荒地」）のクルツに対するささやきは、彼自身が知らない自己の本性に関わる、抗（あらが）いがたいほど魅惑的なものであった（149 頁）。

また、聖書における悪霊が跋扈（ばっこ）する地に似て、この大密林（「荒地」）では「怪物的なものが自由気ままに振舞っている」（93 頁）。それは「征服されて囚われの身」になる前の大密林の住民であり、彼らの悪魔じみた狂騒のことである。彼らを見ていて「自分たちと同じ人間なのかと思うと慄然とする」と小説の語り手のマーロウはつぶやく（92-93 頁）。しかし、狂騒状態にあるのはいったいどちらなのか。節度を失った金儲けの亡者の方ではないか、などと考えてしまう。作者コンラッド自身が単純な“文明”と“野蛮”の対の枠には収まっていない人物だと思うからだ。

さて、wilderness の訳語を調べていると、いつもお世話になっているウィキペディアには、次のような定義が示されていた。「ウィルダネス（英語: wilderness）とは、人間活動によって著しく改変されていない地球上の自然環境、または広範な農業利用下のない非都市的土地を指す概念である。この語は伝統的に陸上環境を指すが、近年は海洋ウィルダネスへの関心も高まっている。また物質的以外に、文化的などの広く深い意味を内包する用語である」。

つまり今や、ウィルダネスとは、かつての聖書の荒れ地のイメージを抱きながらも、白人が近代以降に行なった、世界征服＝自然の支配の歴史を反省する倫理的な概念となっているようである。さんざん自然の征服、開発に血道を上げてきながら、まさに「手のひらを反すような」対応だともいえる。もっとも、かつての「荒地」だけではなく、「海」もウィルダネスの対象になっているという点は、現在の環境問題の深刻な地球的広がりを示すものだろう。とはいえ、こうした欧米中心の海洋のウィルダネス保護という主張に対し、世界各地の「海の民」が育んできた伝来の文化や慣習が対立する場合もある。身近なところでは、日本の捕鯨やイルカ漁をめぐる問題などがそうである。

〔“海の花嫁”、ジュゴン〕

かなり前のことだが、サブリー・ムーサ作『腐敗の種』（1973 年刊）という小説を読んだことがある [注 5]。タイトルから、てっきり現代エジプトの政治的腐敗の問題を描いているのかと思って読んだら全然、違った。舞台は 1952 年エジプト革命以前の紅海沿岸、東部沙漠の南部。この作品は、エジプトで沙漠地帯を舞台にした最初の小説だそうである。この地方の荒漠たる山脈に眠る希少鉱物を求めて、開発業者たちが群がってやって来る。彼らは中央政府の許可を得たと言って、海岸地帯に暮らす地元のベドイン住民のことなど眼中にはない。タイトルにある「腐敗」（ファサード）とは、住民たちのにとっての聖なる土地の開発による「汚濁」を意味している。

以上がこの本の背景となる世界だが、今は手元になく、あらすじもまったく忘れてしまった。覚えているのは、保養地まで女漁りにくるファルーク国王（この「カイロ通信」第 7 号参照）の噂など、どうでもいいディテールばかりである。その一つに、地元民の男性が海岸沿いでジュゴンと添い寝するシーンがあってなぜか記憶に残った。現在、この紅海沿岸の観光地では、野生のジュゴンと出会うのが、スキューバーダイビングの大きな楽しみとなっている。ただし、ジュゴンは、臆病でシャイな動物であり、聴覚が敏感なので人が近づくとすぐ逃げてしまう。その一方で「人懐っこい個体」の報告も世界各地であるという。小説のシーンが実話にもとづくものかどうかわからない。

『インドの驚異譚』には、第 2 話「美しい人魚娘の棲む島」や第 18 話「人魚の棲む島から連れ帰った女の運命」など、人魚をめぐる奇譚がいくつか登場する。古代『オデュッセイア』に登場する海の女妖怪、半人半鳥のセイレーンのように、船乗りたちは、長く厳しい遠洋航海の中で異性恋しさのあまり、幻想に襲われるのだろう [注 6]。ジュゴンを人魚と思いこんだのだのもそのせいだ、というのはよく聞く話である。さらに第 18 話もそうだし、第 23 話「人間と動物の異種間の交配」でも、海洋生物と人間との性の交わりにまで、幻想の話は飛躍していく。

『インドの驚異譚』の第 24 話「ラズルームと呼ばれる人間そっくりな魚」は、ジュゴンについての解説である。ジュゴンは「人間の姿形そっくりで、しかもその雄も雌も、人間の性器と同じような性器を備えている」のだという。この話の解説で、家島先生は、ペルシア出身のイブン・アル＝ファキーフによるアラビア語の地理書『諸国誌』を引用している。「それには [まるで人間の] 女の [陰部の] 割れ目と同じような割れ目があって、その顔は豚のようである」とのことであるが、より客観的な描写である。さらに第 24 話では「その魚には象の皮膚より分厚い皮があって、捕獲の対象にされるが、その魚の皮は鞣（なめ）されて、薄皮のスリッパの材料として使われるという」という記述が続く。ジュゴンはアラビア語でいくつかの名前で呼ばれており、多いのは、アトゥームあるいはアトゥマであるが、紅海の漁師の間で「ジ [ギ] ルド」（皮）と言われるというのはそのせいであろう。もちろん、現在は、ジュゴンの捕獲は厳しく禁じられている。同じく、紅海地方でジュゴンは、別名「海の花嫁（アルーサ・バハル）」と呼ばれるというが、もしかし

たら先に引用した解説と関係があるかもしれない。

〔海亀を救え！〕

若い女性が海亀の生き血を飲むという話を新聞の記事で読んで驚いたことがある。40 年ほど前で、裏一面（最終面）の特集記事（たぶん「アハラーム」紙）だった。舞台は港町アレキサンドリア。妙齢の女の人がコップに入った血をにこやかに飲んでいる写真付きの記事だった。カラーではなかったと思う。こんな慣習が本当にあるのだろうか、などいくつか疑問を抱き、気になっていたので今回、調べてみた。



春のアレキサンドリア港 2026 年 4 月（撮影：長沢美抄子）

たしかにアレキサンドリアでは、海亀の血や、その肉を食べる文化が古くからあったようだ。目撃証言としては 20 世紀初頭（おそらく西洋人によるものであろう）が最初だという。考古学調査では、ヘレニズム期あるいはローマ後期に食用に供された亀の甲羅が見つかったということからかなり古い食習慣のようである。ただし、生き血を飲む習慣がその頃からあったかどうかは分からない。

しかし、海亀の血や肉を消費する行為は、10 年ほど前に始まった保護運動によって現在は、（表向きは？）ほとんど見られなくなっている。かつて人々が海亀の血を好んで飲んだのはその効用による。若い女性の場合、痩せている人は体重を増やし、また子宝にも恵まれる。他方、男性にとっては強壮剤あるいは媚薬になるという話であった。ただし、女性については、太るのではなく「メタボを防ぐ」という効果を謳う反対の情報もある。もしかしたら、伝統的な女性の美しさの基準（Fat/What is beautiful）の変化が背景にあるのかもしれない。かつては女性美の形容の一つに、「足首に付けた足飾り（ハルハール）が回らないほど肥っている」という表現があった。

ところで海亀の「生き血」を飲むのはイスラーム法的には相当に問題である。この記事を読んだ当時も「ハラーム（禁忌）ではないか」と思った。『クルアーン（コーラン）』の「食卓章（第 3 章）」の第 3 節には、「あなたがたに禁じられたものは、死肉、（流れる）血、豚肉、アッラー以外の名を唱え（殺された）ものの、・・・以下、略」（日本ムスリム協会版）とある。神学的理由は異なるが生き血は豚肉と同じくらい、食してはいけないものである [注 7]。

では、海亀の肉の方は食べて大丈夫か。調べてみると、これはイスラームの四つの法学派によって意見が異なっているようだ。シャーフイー、マーリキー、ハンバリーの各派は食べても構わないとする。中には、家畜と同様にアッラーの御名を唱えて喉首を切って屠るべきという慎重な意見を付す法学者もいる。ちなみに魚だったらこのような宗教的な

屠殺の手続きは必要ない。それどころか網にかかった死んだ魚さえ食べてもいいことになっている（動物や鳥の場合は、前に挙げたクルアーンの章句にもとづき「死肉」を食べてはいけない）。

他方、海亀の肉を食べてはいけない、とするのは、ハナフィー派とシャーフィイー派の一部だという。なぜなら海亀は両生爬虫類に属し、不潔だからだそう。ちなみに『インドの驚異譚』には、第 103 話「海亀を食べて夜盲症を患った人たち」がある。記者の家島先生は、この海亀の肉を食べる地域についての諸説を紹介している（東アフリカからマラッカ諸島まで）。説話の背景には、海亀の肉への忌避の感情があるのかもしれない。一方、家島先生によると、12 世紀のアラブ人地理学者イドリースーは、初めて正確な世界地図を作製したことで知られるが、イエメンのアデン湾のある海岸では住民の主食が海亀の肉だという記録を残しているという。

さて、現在のアレキサンドリアで、海亀の血や肉が公然とは食されなくなったのは、以上に述べたイスラームの法制的見解の影響ではなく、環境保護運動の結果である。国際 NGO 「海亀を救え、地中海協会 MEDASSET」が結成されたのは、1988 年のイギリスであった。同協会は、1993 年に現地ギリシアに拠点が作られ、現在、11 カ国が加盟している（トルコやアラブ諸国は入っているが、イスラエルの名前はなし）。エジプトで海亀保護の運動が本格化したのは、2014 年の「アレキサンドリア海亀レスキューチーム（ATRT）」の結成以降のようである。こうした運動に押されて、エジプトの環境省が海亀の保護に乗り出すのは 2017 年のことであった。

〔リゾート開発と環境破壊〕

これらの団体の報告によれば、海亀の生存を脅かしている要因には三つある。第一は、食用のための海亀の捕獲である。これはすでに述べたように現在のところ歯止めがかかっているようだ。第二は、トロール漁業において網にかかってしまう海亀の「事故死」である。毎年 7 千頭以上の海亀が網に巻き込まれ、そのうち数百頭が命を落としているという（これは世界規模の数字であろう）。そして、第三が最近、急速に進む地中海沿岸の大規模な観光開発である。

巨額の資本を投下して開発されるリゾート地の造成は、海岸線の後退や沿岸のエコシステムの破壊を生む。とくに突堤や防波堤の建設は、潮の流れを変化させて海岸浸食を加速化し、海亀の営巣地（産卵地）となる砂浜を減少させている。すでに 2005 年から 2015 年の間だけでエジプトの地中海沿岸では 0.8～3.5 メートル、海岸線が後退し、2021 年の段階で 70%が海水位の上昇の脅威にさらされているという（シンクタンク Alternative Policy Solutions (<https://aps.aucegypt.edu/en>) のレポート“Adasa”による）。

大規模なリゾート開発が進んでいるのは、エルアラメインとマルサ・マトルーフとの間の地域である。エルアラメインは、アレキサンドリアから 100km 西にあり、第二次世界大戦の古戦場として知られる。1942 年の二回にわたる会戦で、“沙漠の狐”ロンメル将軍率い

る独伊軍のエジプト侵攻が食い止められ、スエズ運河占領の野望が阻まれた。この会戦は、同時期のスターリングランド攻防戦（1942-43 年）とともに、大戦の帰趨に大きな影響を与えた。この歴史的会戦の結果、世界有数の未処理の地雷が今も近くに埋まっている。

このエルアラメインから西に 75km ほど行ったところに“サウスメド（the SouthMed：「南地中海」？）”という名前のリゾート開発が現在、進行中である。2030 年完成の予定であり、8km の海岸線にプライベートビーチが作られ、2000 室以上の高級リゾートホテル、50 棟の高級ヴィラ（最高価格 8 億円）、18 ホールのゴルフコースも付いている。とくに問題なのは、国際ヨット・マリーナの建設である。2020 年に完成した近くのマラーシー（Marassi）マリーナについては、すでに深刻な環境被害の報告がある。このリゾートは、アラブ首長国連邦（UAE）のドバイ資本によって開発された。

この「サウスメド」の開発業者は、かつてムバーラク時代、大統領の次男ガマル氏と親交を結んだヒシャーム・タラアト・ムスタファという人物である。上院議員に選ばれ、2011 年革命によって解散させられた当時の与党、国民民主党の政策局メンバーでもあった。政策局長のガマル氏には、カイロ郊外の高級住宅地、「マーディーナティー（「私の町」という意味、でもいったい誰の？）」の便宜を図ったことで知られている。また、2009 年にはレバノン歌手、スーザン・タミームの殺害容疑で逮捕されるというスキャンダルも起こした。この事件で彼は、15 年懲役の判決を受けながら、2017 年に大統領恩赦で釈放されている。

拙著『エジプト革命』（平凡社新書 2012 年）では、ムバーラク時代の腐敗現象の一部を紹介した。しかし、そこで言及した政治家や業者は、その後ほとんどが復権を遂げている。腐敗の根は深く、この国の開発問題にしつこくつきまとっている。「サウスメド」の開発予定地には、元々村があり、政府は住民から 1 m²あたり 2500 エジプトポンド（7500 円）の補償金で土地を買っておきながら、払い下げを受けた開発業者は 70 倍以上、18 万エジプトポンド（54 万円）の価格を設定している。



ムスリム女性用水着（少々派手目）
アイン・ソホナにて（撮影：同上）

そもそもエジプトの海岸線地帯はすべて国有地であり、シナイ半島南部の有名な観光地、シャルム・エル・シェイフをはじめ、多くのリゾート地が政府によって業者に廉価で払い下げられるか、安く貸与されていると思われる。以前に読んだ雑誌で、突撃取材でプライベートビーチに乗り込んだ記者が「国有地なのになぜ市民が利用できないか」、と訴えた記事を思い出す。富裕層用のプライベートビーチが拡大する一方で、庶民が利用できる公共海水浴場の数は減っている。2015 年から 21 年の 6 年間でアレキサンドリア県では 67 から 13 に、マルサ・マトルーフ県では 33 から 11 に減少したという。

たしかシャルム・エル・シェイフだったかと思うが、これも 30 年近く前、土産物屋の前にいた青年から聞いた話を思い出す。エ

ジプトには、1960 年代のナセル時代以来、大学を卒業する青年には全員、政府や公共部門での就職を保障する制度があった。しかし、年を追うに連れ、就職待機の年数が 3 年、やがて 6 年を超えるようになった（現在では事実上、廃止されている）。そこで就職が待ちきれなかったこの青年は、県知事に歎願に行った。すると県知事は、公務員の仕事の代わりに、ここで商売しなさい、と国有地の貸与の話を持ち出したというのである。もちろん、本当の話かどうかは分からない。しかし、県知事は、軍人出身であり、海岸沿いの国有地は多くが軍の管理地である。

〔対外債務と国土の“切り売り”〕

この「サウスメド」からさらに西に、もっと大型のリゾート開発が進行中である。「ラアス・エル・ヒクマ」プロジェクトである。「サウスメド」の 5 倍以上となる、44km の海岸線を持ち、11 の区画にリゾート建設が計画されている。このプロジェクトは、2024 年 2 月、UAE の ADQ（アブダビ開発持株会社）が 350 億ドルの投資を発表したことで始まった。ひとつの国からの直接投資としてはエジプト史上最大の金額である。ただし、この投資計画の背景には、エジプトの経済危機、対外債務の累積の問題があった。

現在のエジプトの対外債務残高は、1650 億ドル。これは国内総生産（GDP）4300 億ドル（2026 年）の 4 割近くに匹敵する大変な額である。対外債務問題をめぐって、エジプトは 1970 年代以来、半世紀の間、IMF との交渉を繰り返してきた。1991 年の湾岸戦争への貢献で債務を半額に減免してもらったこともあった。しかし、いっこうに進まない経済構造改革に、ついに業を煮やした IMF は、3 年前の 2023 年 5 月、公企業の全面的民営化を求めてきた。軍の関係する企業も例外としない、という厳しい要求であった。さらに、これまでエジプト財政を支えてきたサウジアラビアもこれに同調する姿勢を見せた。軍のクーデタで現体制が成立した 2013 年（6 月 30 日革命）以来、湾岸諸国は、エジプト中央銀行に累計 1000 億ドルもの金額を預け入れて、この政権の安定化に寄与してきた。

この IMF とサウジが要求する改革は、エジプトの現体制にとって対応次第では深刻な危機を招きかねない難題であった。なぜなら、改革の荒療治をすれば、政権基盤である軍との関係が悪化することは必至だったからである。このエジプト政府の苦境を救ったのが、2023 年 10 月に始まるガザ戦争（イスラエルによるガザでのジェノサイド）であった。地域情勢が流動化する中、「国際社会」は、エジプトの体制の安定化を望み、結果として改革要求に手心が加えられたように見える。たとえば当時、イスラエルはガザからエジプトへの住民の大量移送を公然と表明しており、もしそれが許された場合には、エジプトは大混乱に陥ったであろう〔注 8〕こうした背景があるのか、詳しい経緯は分からないが、IMF との交渉は穏便な形で進み、厳しい要求をかわすことができた。このときエジプトをさらに手助けしたのが、UAE のアブダビ資本による「ラアス・エル・ヒクマ」地区開発の 350 億ドル投資という形の資金援助であった。

ただし、めでたしめでたし、と言うばかりにはいかない。19 世紀の中国が列強の圧力に

屈して与えた租借地に似ている、とまでは言わないが、国の借金のための国土の“切り売り”という印象を内外に与えかねないからである。アブダビ資本は、すでに紅海沿岸の二箇所のリゾート開発に手を染め（北部の「エル・グーナ」と南部の「ポート・ガーリブ」）、さらに 2025 年 4 月にはポートサイド市東岸に産業港湾地区の 50 年租借契約を結んでいる。

一方、エジプトは、サウジアラビアに対しても 2016 年、紅海のアカバ湾入り口にあるチランとサナフィールの二島を移譲する約束をした。この戦略上重要な二島は、1950 年までサウジ領であり、対イスラエル防衛上の理由からエジプトに管理が委ねられていた背景がある（1967 年 6 月の中東戦争は、エジプトによるチラン海峡の封鎖が開戦の口実とされた）。とはいえ、なぜこの時期に返還に合意したのか。公式には、サウジが計画しているアカバ湾近くの大規模スマートシティ「ネオム NEOM」プロジェクトとの関連が説明されている。しかし、同時期に行なわれたエジプトへの財政支援の見返り、という見方は否定しがたい。

ところで「サウスメド」のあるエル・ダバア地区には、ロシアの資金技術協力による原子力発電所が建設中である。2015 年に建設協定が結ばれ、2030 年の操業開始に向け、現在、その最終段階に入っている。大規模リゾート地に、原発、そして広大な地雷原。何という物凄い組み合わせであろうか。

8 月半ばに海を見に行った。こちらに来てから初めて見る海であった。「カイロ通信」第 7 号で紹介した、ガザから避難して来ているパレスチナ人の子どもたちに海水浴の機会を与えたいと考え、その下見に行ったのである。妻の発案で、これまでもパレスチナ人避難民について協力をいただいていた元エジプト外務省職員のカドリーさんに今回もお世話になった。向かったのは、スエズの南のアイン・ソホナという紅海の保養地である。最初、彼が会員となっているプライベートビーチに行った。しかし、会員以外の利用は認められないというのが、元将校（軍か警察かは分からない）の管理事務所長の答えだった。そこで軍が管理する大衆的な海水浴場の施設に行ったところ利用の許可を得た。それから 3 回、ガザの子どもたちは海水浴に行った。いずれも車代や施設利用料金など費用は、「カイロ通信」第 3 号でも紹介した中野正道さんが出してくださった。

ガザに住むパレスチナ人にとって海は身近な存在である。カイロからアイン・ソホナまでは 2 時間近くはかかる。こんなに海が遠いとは知らなかった子どもたちにとって、またほとんど家の近くから外に出かける機会のない子どもたちにとって、貴重な経験となったであろう。ある中学生の女の子は、これまで生きてきた中で一番楽しい日だった、と話していたと妻が聞いた。



アイン・ソホナの“大衆的”プライベートビーチ

第 7 号でも少し紹介したが、このガザから来ているパレスチナ人の子どもたちのオンライン教育を支援するために、タブレットを配布する運動を始めようとしている。

ガザの避難民の子どもたちに、学びの希望を届けよう！

——日本の市民によるタブレット・キャンペーン——

《パレスチナのための市民イニシアティヴ C I P-J》である。

まもなく皆さんにお伝えする日が来ると思う。

[注 1] 長沢栄治「エジプトのコプト暦」小島麗逸・大岩川嫩編『「こよみ」と「くらし」——第三世界の労働リズム——』（アジア経済研究所 1987 年；【復刻版】2025 年）参照。

[注 2] ブズルク・ブン・シャフリヤール [家島彦一訳]『インドの驚異譚—10 世紀〈海のアジア〉の説話集』1・2（東洋文庫 813・815）平凡社；ジョセフ・コンラッド『闇の奥』（[中野好男訳] 岩波文庫版 1958 年／[高見浩訳] 新潮文庫版 2022 年）

[注 3] ロナルド・シーガル（設楽國広監訳）『イスラームの黒人奴隷—もう一つのブラック・ディアスポラ』明石書店 2007 年を参照。

[注 4] アラブの地理書にも登場する“ワークワーク”とは、マルコポーロの言う「黄金のジパング」（日本）を指すという見方もある（「倭国（わこく）」が訛ったという説）。しかし、家島先生の解説によれば、インド洋海域の東端と南端に広がる、現実と未知・空想が混在した、いわば〈ぼやけた境域世界〉を意味する、とのことである（『インドの驚異譚』第 1 巻 85 頁）。

[注 5] Sabri Moussa [trans. Mona N. Mikhail]. *Seeds of Corruption*. Northampton: Interlink Publishing Group. 1973；アラビア語原書：Šabrī Mūsā. *faṣād al-amkina* [直訳『場所の腐敗』]. Cairo: al-Hay'a al-Miṣrīya al-‘Āmma li-l-Kitāb. 1973.

[注 6] クリストファー・ノーラン監督の映画「オデュッセイア」（2026 年）が最近、日本でも公開が開始された。ただし、同映画は、モロッコが 1975 年以来、不法に占領している西サハラをロケに使い、占領やその観光開発の正当化に加担しているとして批判されている。『西サハラ友の会通信』（2026 年 9 月 23 日）の「映画「オデュッセイア」と西サハラ～「凄い映画だった！」で終わらせないために」（<https://fwsjp.org/archives/6606>）を参照。

[注 8] 中村生雄『祭祀と供儀 日本人の自然観・動物観』（法蔵館 2001 年）によれば、ユダヤ教の場合、旧約聖書『レビ記』の記載にあるように、＜血＞は本性上、神に帰属するものであり、屠殺に際しては土に注ぎ神に返し、これを飲んでではない、この考え方はエヴァンス＝プリチャードが調査したヌアー族でも同様であるという（同 10－11 頁）。

[注 7] 長沢栄治「ガザ住民移送計画とエジプトの対応」『學士會会報』967 号（2024 年 7 月）を参照。